

### 3. 富田のお酒

摂津の国、富田郷。富田の地名はかつてこの地で皇室御料の屯田が営まれていたことに由来します。優良米の産地で育成された良質の酒米と、石灰層を通過して湧き出る阿武山々系の清水で醸し上げられたのが富田酒です。

#### 3-1. 富田の酒造りの由来

- 1471年（文明3年）富田の好田吉右衛門が造酒屋「奈良屋」を興す。  
富田で事業としての酒造りが始まる最初です。
- 1573年（天正元年）奈良より清水家（清水市郎右衛門利重）が富田に紅屋（紅粉屋）を興す。
- 1582年（天正10年）6月本能寺の変・山崎合戦（羽柴秀吉が富田で軍議）  
1585年（天正13年）羽柴秀勝（織田信長の四男秀吉の養子）が富田の宿に楽屋  
楽座の掟を出す。
- 慶長5年（1600）関ヶ原の戦い  
清水家は関ヶ原の戦いや大阪夏の陣に際して、徳川軍に協力した功績で、  
将軍御目見が許され、特権的な酒造りの免許（由緒株）を得る。  
（三代将軍家光の時代）一般的には清水株といわれ1,800石あった。
- 由緒株は、「清水株」の他に「高橋株」と「菊屋株」の3つしかなかった。  
※ 由緒株の特権はお米の保障と冥加金（税金）を納めなくてもよかった。  
※ 冥加金=江戸時代の雑税の一つで商工業者などが営業免許や利権を得た  
対象として、利益の一部を幕府または領主におさめるもの。
- 江戸中期には、富田の酒造りは隆盛を極める。  
当時は24軒の酒蔵があり8,270石（その内紅屋1,800石）  
清冷な伏流水による「富田酒」は江戸でも知られた銘酒だった。
- 富田十人衆  
紅粉屋・蔵屋・菊屋坪屋・丸屋・橘屋・薬屋・柏屋・亀屋・立野
- 現在の富田酒蔵  
壽酒造、清鶴酒造の2軒となりましたが、江戸時代から受け継がれる酒造り  
の伝統を守りながら、新しい酒造りも追求し続けておられます。

#### 3-2. なぜ富田酒が衰退したのか

最初、富田の酒を江戸に運ぶ手段は陸路だったが、1619年（元和元年）菱垣廻船が多量の酒を運ぶようになり、伏見や灘のように水路や港に近い酒蔵が有利になるとともに、減株令が出たり清水株の分配が進み、富田酒の衰退がはじまった。

紅屋が灘などに由緒株を貸して紅屋が酒を造らなくなる。

昭和30年ごろには宝雪・朝日酉などの酒蔵が在ったが、大規模生産をする酒蔵が出現してきた。

※ 菱垣廻船とは、日本の江戸時代に、大坂などの上方と江戸の消費地を結んだ廻船である。当時、存在した同様の貨物船の樽廻船と並び称される。菱垣とは、両舷に設けられた垣立と呼ばれる舷牆に装飾として木製の菱組格子を組んだ事に由来する。

現在では「清鶴」と「国の長」の二つの酒蔵が歴史を引き継ぎ伝統を守りつつ、時代の流れに合わせて楽しめる酒も生み出しておられます。